
君の手のひらに

ホワイトピンク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の手のひらに

【Nコード】

N34020

【作者名】

ホワイトピンク

【あらすじ】

2年間の片想いをしている主人公（女）と、その相手誠の恋愛小説。
中学生の私が書いた、中学生にしか分からない心情を書きました。
暇つぶしにどうぞ

はじまり

ふう。と、深呼吸して、スタートラインにつく誠。

私はうつとりとしてその姿を見守る。

合図と同時に、誠は風を走り抜ける。

キラキラとした余韻を残しながら、誠は笑顔でゴールした。

先生が大きな声でタイムを叫ぶ。

おお。というどよめきが起こり、女子の熱い視線を独り占めする誠。

はあ　　格好いい。

「お前、どんだけ誠のこと好きなんだよ。」

私の右隣で優斗が小声で言った。

「へっ?」

「顔、ニヤついでる。」

私は慌てて自分の頬を触る。

触って、その上がりきった頬を、両手でぎゅーっと無理矢理下げる。

数学の授業をしている先生に見つからないように、優斗に顔を向けた。

「わはっへはいほ?」

「何言ってるか分からない。」

「わ、笑ってないよ!」

「ああ。なるほど。ってその顔!　ぶっ。」

優斗はそういつて笑った。

笑って、それから真面目な顔になる。

「せっかく可愛いのに。」

不覚にも、私はドキっとしてしまった。

私は窓の外を見ながら言う。

「優斗は優しいねえ。」

「まあねえ。」

「はあ 私も優斗くらい優しくかったら誠も振り向いてくれるのかなあ？」

「さあ？もう振り向いてたりしてねえ。」

「それはないよ。 誠おゝ。」

私は机に突っ伏した。

「耳まで赤いよ？」

「うるさいなあ。」

私はもう一度校庭を見た。

ダサイジャージも、誠が着ると格好よく見える。

本当に、素晴らしい人だと思う。

授業が終わり、優斗は私に言った。

「1組行くけど、一緒に来る？」

「行く！」

1組は誠のクラスだ。

誠の席はドアの近くなので、1組に行くだけで誠に近づくことができる。

「はあ。お前ベタ惚れにもほどがあるよ。」

「悪かったわねえ。」

「俺は女には興味ないし、恋とかしたこともないから分からないけどさあ、そんだけ好きになれる誠ってスゴいよな。」

「誠は偉大だよ！」

「ふう〜ん。」

優斗は興味なさそうに言った。

優斗と誠

そして、すたすたと1組にたどりつく。

ずかずかと1組に入って行く優斗と、ドアの陰に隠れる私。

優斗は誠の首の後ろをぎゅっと掴みながら言った。

「よお誠。」

「うぎゃっ！なんだよ！いきなり人殺す気！？」

誠は読んでいた文庫本を投げ飛ばして叫んだ。

1組のみなさんの冷たい視線。

「うわあゝ優斗のせいで浮いちゃったじゃん。」

キレイな声だなあ。

「つてかなんの用なの？」

誠は床に落ちた本を拾いながら廊下にてた。

わっ！見つかる！

私は急いで掃除ロッカーの後ろに隠れた。ホコリが目に入る！

「いやあ。誠クンにお願いがあつてねえ。」

「なにになに？」

「明日俺の家に来てベンキョウを教える。」

「断る」

即答。カツコイイ。つてか私も勉強教えてもらいたいんですけどつ！

「なんでだよお。誠頭いいじゃん。」

「よくない。なんだつたらお前の隣の席の人にでも教えてもらったら？」

「へ？隣？誰だっけ？」

私です！

私の話をしてくれてる！

まあどうせ私だって知らないけどテキストに隣の席って言ったただけだろうけど。

でも嬉しいよね。

「とにかくお前の家に行くのは、無理。」

「なんでえ？」

「だって」

誠がちよつと顔を赤らめる。

え、なに！？可愛い！

「だって？」

「優斗の家には大きい犬がいるから

かわいい！

「犬？んなもん怖いのお前？ぎやはは！」

「違う！俺、犬アレルギーだから。」

「分かった分かった。」

「分かってないでしょ！」

誠がジタバタして優斗の頭を叩く。

「痛い！じゃあ俺明日お前の家に行くわ。」

「まあそれならいいけど。」

誠は叩いていた腕を下ろした。

良いのかよ！良いなあ。羨ましいなあ。

「じゃあ明日。」

片手をふりながら、優斗は廊下を歩いていった。

「待ってよ！何時に来るの？」

「4時くらい？あ、朝のネ」

「はっ！お前ちよつと待て！常識的に」

そこでチャイムが鳴った。

キーンコーンカーンコーン

諦めて教室に戻る誠の姿を見送ってから、

私は掃除ロッカーから出てきた。

「げほつげほつ」

咳が止まらない。

私は涙目になりながら1組のドアの前を通り過ぎた。

1番廊下側の1番前の席が、誠の席だから、ドアの前を通るといつものクセでそこを見てしまう。

そして今日は、
ラッキーなことに、
ばちッ。

目が合った。

鼓動が早まる。

咳は止まらない。

だけど不思議とイヤじゃない。

私は自分の席について、優斗にひと言。

「やっぱ誠カッコいいね。」

「もう聞き飽きた。」

雑談

「そういえば誠ね、この前妹と手つないで歩いてたよ。」
当然のようにおしゃべりタイムとなってしまうた自習の時間、私は優斗と落書きをしながら話していた。

「へえーシスコン？」

「だよ。」

「くわあんわいい〜！」

私は身悶えする。

「妹確か3歳だったかな。」

「歳そんなに離れてるんだ。」

「12歳差？両親頑張ったね。」

優斗がニヤリとつぶやく。

「これだから男子は」

やれやれと私は飽きれる。

「違うよ。ってかそれ言ったら誠だって男子だからね！」

「誠は男子だけど男子じゃないいい！」

「いや、それ別の意味でとらえられるから。」

「それでもいいいい！」

「は？お前ホモ？」

馬鹿じゃないの？という目線を送り、私はルーズリーフに誠の似顔絵を書く。

「似てない？」

「似てない。お前美化しすぎ。誠なんてこんなだよ。」

優斗がすらすらと誠の似顔らしきもの絵を描く。

「なにこれ。似てないよ！ってか、どうみてもニートでオタクの顔じゃん。目が死んでる！」

「アイツニートでオタクじゃん。目死んでるし。ははっ！」

「ちがうちがうっ！」

そういつて私は自分の描いた誠に体と付け足す。

「　こんな感じ？誠って美脚だよー」

「　ってかアイツ、スネ毛剃ってるから。」

「　え？マジ！かわいいiiiiiiii!」

「　お前オカシイだろ　　何？そんなのに萌えちゃうわけ？」

「　萌え萌えだよお。」

「　お前、変。」

優斗は『女子って意味不明』とつぶやきながら机から本を取り出して読み始めた。

「　俺、これから本読むから話しかけんな。」

「　へいへい。」

私も本を探す。

読み始める。

ざわざわという教室の音が段々大きくなって、しまいには隣のクラスから苦情くる。

そんなお決まりのやりとりを聞き流しながら、私は本に没頭した。

そんな、6月。

2人で

合唱コンクール。

そう。クラス対抗で歌の上手さを競い合う、学校大3イベントの一つがやってくるのだ。

私はテンションマックスで大声を出した。

「みんなー！1位目指すよー！」

「うっしやー！」

このクラスがテンションとノリがいいのだけが取り柄だ。

私は気づいたら指揮者になっていたので、思いっきり仕切っていた。

「ここ！フォルテだからもっと出して！」

「ちーーがー！うー！感情込めて歌わなきゃ！」

「こらー！音が違うんだよ！」

「お前らどこの国の人だよ！日本語で歌え！歌詞がさっぱり聞こえない！」

みんなは私に文句を言うことなく、真剣にハーモニーを奏でる。

中学校生活最後の年。1位をとることにみんな必死だ。

「じゃあ明日はここの小節から行くねー！家で練習してこいよー」

「はい」

・・・疲れた。

放課後の30分間の練習が終るころには、みんなの顔は青白くなっていた。

「お疲れさまでしたー」

みんな解散して帰りの用意を始める。

私はヘトヘトになって自分の机に突っ伏した。

今すぐバッグを持つ気力はない。

「ってか、鈴　キャラ違う。」

席にバッグをとりきた優斗が私に言う。

「へ？」

「お前そんなに熱血だったっけ？」

「うるさいなー」

私は優斗の背中をポンッと叩く。

「イテ。」

気づけばもう7月。

かれこれ優斗とは3ヶ月間も隣の席をやっている。

席替えはしないのだろうか。

まあこの窓際の席を手放すのは惜しいので、しなくてもいいのだが。

「でもお前は男勝りだよ。うん。」

「それって褒めてんの？」

「褒めてる褒めてる。」

「嘘つくなあー」

思ったよりも声がかかったようで、教室にその声が響いてしまった。

「響いたね。」

「うん。」

「ってかもう俺らしかいなくね？」

「うそ。」

私は教室を見回す。

しーん。

いつの間にか誰もいなくなっていた。

「帰りますか。」

「一緒に？」

「ダメ？」

「いいんじゃない？」

こうして私と優斗は一緒に帰ることになった。

私と優斗は席以外の場所で話したことがない。

いつもとちよつと違うシチュエーションに、ドキドキしてしまった。

それに私は男子と2人で下校するなんて初めてだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3402o/>

君の手のひらに

2011年1月16日09時10分発行